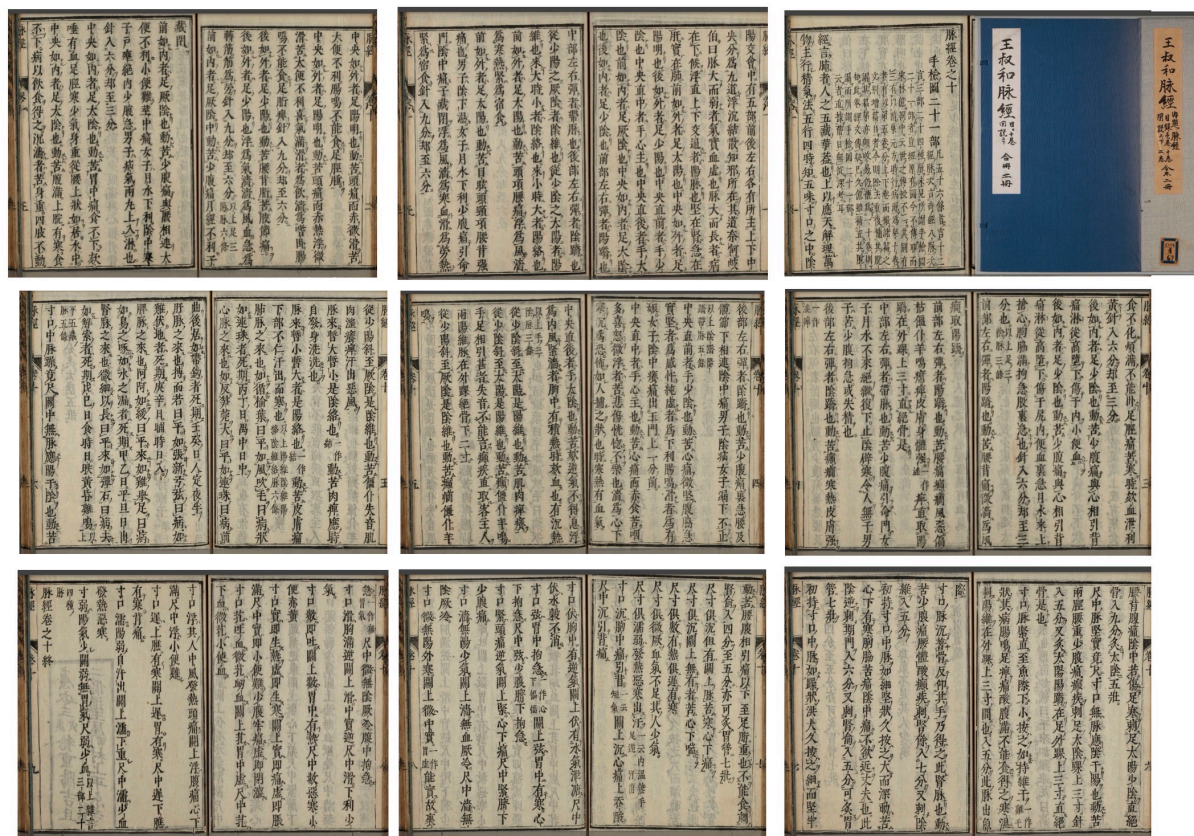


「氣口九道脈」脈法の由来に関する考察：

1 🌱 晋代王叔和《脈經卷之十・手檢圖二十一部》における「氣口九道脉」

晋代王叔和《脈經・卷十手檢圖二十一》



《脈經卷之十・手檢圖二十一部》現代日本語訳

【巻頭の解説】

本巻は全部で五十六条からなり、初めに十二経脈、次に奇経八脈、続いて寸・関・尺の三部における二十四種の脈について述べている。末尾に、いわゆる「手検図二十一部」という名称が見えるが、もともと本書には図があり、今は伝わっていないのであろうか。

宋代の林億・劉中は、次のように述べている。「世に伝えられている本は一定せず、その違いには三通りある。晋の巢元方の『時行病源』を第十巻としているものがある。また、第五巻を上下二巻に分け、諸篇の文章を抜き出して、別に篇目を増やしているものがある。今回、重複を除き、脱落を補い、篇の順序にもかなり変更を加えたが、従来どおり二十巻とした。」

このことから、本巻の経文の伝承には、古くから疑問があったことが分かる。林億は脱落を補正したものの、「手検図二十一部」という名称については、単に旧来の目録に従っただけで、それ以上詳しく考証する手がかりはなかったのである。

【肺と寸口の九道】

経文には、次のようにある。肺は、人の五臓を覆う華蓋である。上にあって天に応じ、万物を調理し、精気の運行をつかさどる。五行と四季の法則に従い、五味を知る。

寸口は陰陽が交わる場所であり、その中には五つの部位がある。前・後・左・右には、それぞれつかさどるものがあり、上・下・中央によって九道に分けられる。脈の浮沈、結集、散開を診ることで、邪の所在を

知ることができる。

その診方はどのようなものであろうか。岐伯はいう。「脈が大きく弱いものは、気が実し、血が虚している。脈が大きく長いものは、病が下部にある。浮いてまっすぐに上下へ通じるものを診た場合、それは陽脈である。堅い脈は腎、急な脈は肝、実した脈は肺に病がある。」

【九道と経脈との対応】

前部の脈が外側へ向かうものは、足太陽である。中央部の脈が外側へ向かうものは、足陽明である。後部の脈が外側へ向かうものは、足少陽である。

中央部の脈がまっすぐ前へ向かうものは、手少陰である。中央部の脈がまっすぐ中央にあるものは、手心主である。中央部の脈がまっすぐ後ろへ向かうものは、手太陰である。

前部の脈が内側へ向かうものは、足厥陰である。中央部の脈が内側へ向かうものは、足太陰である。後部の脈が内側へ向かうものは、足少陰である。

前部の脈が左右に弾くものは、陽蹻脈である。中部の脈が左右に弾くものは、帯脈である。後部の脈が左右に弾くものは、陰蹻脈である。

少陽の部位から厥陰の部位へ向かうものは、陰維脈である。少陰の部位から太陽の部位へ向かうものは、陽維脈である。脈が大きく来て、ときに小さくなるものは、陰絡である。脈が小さく来て、ときに大きくなるものは、陽絡である。

【足太陽の脈】

前部の脈が外側へ向かうものは、足太陽である。この脈に変動があると、頭・項・腰が痛む。浮いていれば風、潜んでいれば寒熱、緊であれば宿食である。

前部の脈が外側へ向かうものは、足太陽である。この脈に変動があると、目がくらみ、頭・頸・項・腰・背がこわばって痛む。男子では陰部の下が湿り、女子では月経血が下り続け、少腹の痛みが命門へ引きつれる。また、陰部の内部が痛み、胞宮が閉塞する。浮いていれば風、潜んでいれば寒、血脈が滑であれば労熱、緊であれば宿食である。鍼を九分まで刺入し、六分の深さまで引き戻す。

【足陽明の脈】

中央部の脈が外側へ向かうものは、足陽明である。この脈に変動があると、頭が痛み、顔が赤くなる。脈が微滑であれば大便が出にくくなり、「陽易」があり、食べられず、下腿に痺れが生じる。（「陽易」の意味は不明瞭なため、原語を残す。）

中央部の脈が外側へ向かうものは、足陽明である。この脈に変動があると、頭が痛み、顔が赤く熱くなる。脈が浮いて微滑であれば、大便が出にくく、気が満ちて張りやすい。滑であれば水飲があり、潜んでいれば眠りたがる。腸が鳴り、食べられず、下腿に痺れが生じる。鍼を九分まで刺入し、六分の深さまで引き戻す。

【足少陽の脈】

後部の脈が外側へ向かうものは、足少陽である。この脈に変動があると、腰・背・下腿・大腿および関節が痛む。

後部の脈が外側へ向かうものは、足少陽である。浮いていれば気の病、深く潜んでいれば風の病である。血脈が急であれば筋がつり、筋の病は労傷による。鍼を九分まで刺入し、六分の深さまで引き戻す。

（以上、足三陽の脈六条。）

【足厥陰の脈】

前部の脈が内側へ向かうものは、足厥陰である。この部の脈に変動があると、少腹が痛み、月経が順調に通じず、胞宮が閉塞する。

前部の脈が内側へ向かうものは、足厥陰である。この脈に変動があると、少腹が痛んで腰へつながり、大便が出にくく、小便がしにくく、陰茎の内部が痛む。女子では月経血が下り続け、陰部の内部が冷え、陰戸に癰が生じる。また、内部が閉塞して少腹が引きつる。男子では疝気があり、両方の睾丸が上へ引き上がり、

淋の症状が現れる。鍼を六分まで刺入し、三分の深さまで引き戻す。（「絶内」および「両丸上入淋也」は、句読と意味に疑義があるため、字面に沿って訳した。）

【足太陰の脈】

中央部の脈が内側へ向かうものは、足太陰である。この脈に変動があると、胃の中が痛み、食物が下りず、咳や唾に血が混じり、下腿が冷える。また、気が少なく、身体が重く、腰より上が水中にいるように感じられる。

中央部の脈が内側へ向かうものは、足太陰である。この脈に変動があると、腹が張り、「上脘」に寒があり、食物が下りない。この病は飲食によって生じる。脈が沈んで潜むものでは、身体が重く、四肢を動かさない。（「上脘」は原文のままとし、部位の断定を避ける。）

食物が消化されず、煩わしく張って横になれず、下腿が痛み、寒さに苦しむ。ときに血を咳き出し、黄色い下痢便が出る。鍼を六分まで刺入し、三分の深さまで引き戻す。

【足少陰の脈】

後部の脈が内側へ向かうものは、足少陰である。この脈に変動があると、少腹が痛んで心の部へ引きつれ、背が痛み、淋の症状が現れる。また、高い所から落ちて内部を傷め、血尿が出る。

後部の脈が内側へ向かうものは、足少陰である。この脈に変動があると、少腹が痛んで心の部へ引きつれ、背が痛み、淋の症状が現れる。また、高い所から落ちて臀部を傷め、内部からの出血が便に現れ、裏急が生じる。月経が来ると上へ突き上げて心の部に迫り、胸脇が張って引きつれ、大腿の内側も引きつる。鍼を六分まで刺入し、三分の深さまで引き戻す。

（原文には「以上、足三陰の脈三条」とある。）

【陽蹻脈】

前部の脈が左右に弾くものは、陽蹻脈である。この脈に変動があると、腰背が痛む。脈が微で潜んでいれば風であり、長く治らないものは陽蹻脈を取る。

前部の脈が左右に弾くものは、陽蹻脈である。この脈に変動があると、腰痛、癰瘤、悪性の風病、半身不随が生じ、身体が硬直して倒れ、羊の鳴き声のような声を出す。また、痺があり、皮膚や身体がこわばる。

（「痺」は、別本では「痒」とする。）直接、陽蹻脈を取る。部位は外果の上三寸、絶骨にまっすぐ当たるところである。

【帯脈】

中部の脈が左右に弾くものは、帯脈である。この脈に変動があると、少腹の痛みが命門へ引きつれる。女子では月経が来なくなり、途絶えた後に再び下る。陰部に偏った冷えがあり、子を得られなくなる。男子では少腹が引きつり、あるいは精が漏れる。（「絶継復下。止陰僻寒」は意味が明確でないため、大意に沿って訳した。）

【陰蹻脈】

後部の脈が左右に弾くものは、陰蹻脈である。この脈に変動があると、癰瘤、寒熱が生じ、皮膚がこわばる。（別本では「淫痺」とする。）

後部の脈が左右に弾くものは、陰蹻脈である。この脈に変動があると、少腹痛と裏急が生じ、腰から髕関節の下へつながって痛み、陰部の内部も痛む。男子では陰疝があり、女子では月経期以外の出血が止まらない。（以上、陰蹻・陽蹻・帯脈五条。）

【手少陰の脈】

中央部の脈がまっすぐ前へ向かうものは、手少陰である。この脈に変動があると、心の部が痛む。脈がやや堅ければ、腹や脇が引きつる。実して堅ければ感忤であり、ただ虚しているものでは下痢と腸鳴が生じる。滑であれば妊娠している。女子では陰部の内部に瘡〔次の一字は判読できない〕があり、玉門の上一分の前

方に現れる。（末尾は句読および部位に疑義があるため、原文に沿って訳した。）

【手心主の脈】

中央部の脈がまっすぐ中央にあるものは、手心主である。この脈に変動があると、心の部が痛み、顔が赤くなり、食事の際に飲み込みにくく、喜怒の変化が多くなる。脈が微浮であれば、悲しみ、精神がぼんやりして楽しくない。潜んでいれば心下に寒がある。沈であれば、誰かに捕らえられそうな様子で恐れ、ときに寒熱があり、血気の病がある。

【手太陰の脈】

中央部の脈がまっすぐ後ろへ向かうものは、手太陰である。この脈に変動があると、咳が出て気が上逆し、呼吸ができない。浮いていれば内風である。緊で潜んでいれば胸中に積熱があり、ときに血を咳き出す。また、深く潜んだ熱がある。（以上、手三陰の脈三条。）

【陽維脈】

少陰の部位から斜めに太陽の部位へ至るものは、陽維脈である。この脈に変動があると、筋肉に痺れや痒みが生じる。

少陰の部位から斜めに太陽の部位へ至るものは、陽維脈である。この脈に変動があると、癰が生じ、身体が硬直して倒れ、羊の鳴き声のような声を出し、手足が互いに引きつる。甚だしい場合は声が出なくなり、話せず、癰疾を発する。直接、客主人を取る。左右の陽維脈の部位は、外果の絶骨より下二寸にある。

【陰維脈】

少陽の部位から斜めに厥陰の部位へ至るものは、陰維脈である。この脈に変動があると、癰癤が生じ、身体が硬直して倒れ、羊の鳴き声のような声を出す。

少陽の部位から斜めに厥陰の部位へ至るものは、陰維脈である。この脈に変動があると、身体が硬直して倒れ、声が出なくなり、筋肉に広く痒みや痺れが生じ、汗が出て、風を嫌う。

【陰絡と陽絡】

脈が一時大きく、一時小さく来るものは、陰絡である。（「絡」は、別本では「結」とする。）この脈に変動があると、筋肉に痺れが生じ、時に応じて自然に発作が起こり、身体がぞくぞくする。

脈が一時小さく、一時大きく来るものは、陽絡である。（「絡」は、別本では「結」とし、「也」は、別本では「動」とする。）この脈に変動があると、皮膚が痛み、下部の感覚が鈍くなり、汗が出て寒くなる。

（以上、陽維・陰維・陽絡・陰絡の脈六条。）

【五臓の平脈・病脈・死脈】

肺の脈が来るとき、榆の葉を指でなぞるようであれば平脈という。風が毛を吹くようであれば病脈という。珠が連なったようであれば死脈である。その時期は丙・丁の日、禺中または日中である。

心の脈が来るとき、逆向きの筍のようで、先端の芒が大きければ平脈という。珠が連なったようであれば病脈という。前が曲がり、後ろが留まり、帯鉤のようであれば死脈である。その時期は壬・癸の日、人定または夜半である。

肝の脈が来るとき、「搏而若」であれば平脈という。新しく張った弓の弦のようであれば病脈という。鶏が地に伏したようであれば死脈である。その時期は庚・辛の日、晡時または日入である。（「搏而若」は字義が不明瞭なため、原語を残す。）

脾の脈が来るとき、ゆったりと緩やかであれば平脈という。鶏が足を上げるようであれば病脈という。鳥がついばむよう、または水が漏れるようであれば死脈である。その時期は甲・乙の日、平旦または日出である。

腎の脈が来るとき、微細で長ければ平脈という。石を弾くように来れば病脈という。去るときに縄がほどけるようであれば死脈である。その時期は戊・己の日、食時・日昃・黄昏・鶏鳴である。

(以上、五臓の脈五条。「死脈」とその日時は、原文に記された古代の予後判断を訳したものである。)

【寸口・尺中の異常と鍼灸】

寸口の脈が騒がしく動き、関・尺にはまったく脈がないものは、陽が陰に応じるものである。この脈に変動があると、腰・背・腹が痛み、陰部の内部が傷ついたように感じられ、足が冷える。足太陽・足少陰を刺し、絶骨にまっすぐ当たるところに九分刺入する。また、足太陰に五壯の灸をする。

尺中の脈が堅く実し、寸口にはまったく脈がないものは、陰が陽に応じるものである。この脈に変動があると、両下腿と腰が重く、少腹が痛み、癰疾が生じる。足太陰の内果上三寸を刺し、五分刺入する。また、足太陽・陽蹻に灸をする。その部位は外果の上三寸、絶骨にまっすぐ当たるところである。

寸口の脈が緊で、まっすぐ魚際の下まで至り、軽く押すと「維巾」を持つような感触がある。(別本では「鶏毛」とする。「維巾」の意味は不明瞭である。)その病では腸が鳴り、足に痺れ、痛み、だるさがあり、腹が張って食べられない。これは寒湿によって生じる。陽維脈を刺す。部位は外果の上三寸の間で、五分刺入する。この脈は魚際まで現れる。

寸口の脈が沈んで骨に着き、手を返して掌を上に向けて初めて得られるものは、腎の脈である。この脈に変動があると、少腹が痛み、腰や身体がだるく痛み、癰疾が生じる。腎俞に七分刺入し、さらに陰維脈に五分刺入する。

寸口の脈を初めて取ると細く堅いが、長く押すと大きく深くなる。この脈に変動があると、心下に寒があり、胸脇が痛み、陰部の内部が痛んで、夫に近づこうとしない。これは陰逆である。期門に六分刺入し、さらに腎俞に五分刺入する。また、胃脘に七壯の灸をしてもよい。

寸口の脈を初めて取ると騒がしく洪大であるが、長く押すと細く堅固になる。この脈に変動があると、腰と腹が互いに引きつれて痛み、下方の下腿まで重くなり、食べられない。腎俞に四分から五分刺入する。また、胃脘に七壯の灸をしてもよい。

【寸・関・尺三部の脈と病候】

寸・尺がともに沈み、関上だけに脈があるものは、寒さに苦しみ、心下が痛む。

寸・尺がともに沈み、関上にも脈がないものは、心下で喘ぐ。

寸・尺がともに数であれば熱があり、ともに遅であれば寒がある。

寸・尺がともに微であれば厥があり、血気が不足し、その人は気が少ない。

寸・尺がともに濡弱であれば、発熱し、悪寒があり、汗が出る。(別の記述では「内部に温熱があり、手足が厥冷し、汗が出る」とする。)

寸口が沈であれば、胸中の痛みが背へ引きつれる。(別の記述では「短気」とする。)関上が沈であれば、心の部が痛み、酸が上がってくる。

尺中が沈であれば、背へ引きつれて痛む。

寸口が伏であれば、胸中に上逆する気がある。関上が伏であれば、水気があって泥状の下痢便が出る。尺中が伏であれば、水穀が消化されない。

寸口が弦であれば、胃の中が引きつる。(別本では「心下が塞がったように苦しい」とする。)関上が弦であれば、胃の中に寒があり、心下が引きつる。尺中が弦であれば、少腹と臍の下が引きつる。

寸口が緊であれば、頭痛と気逆がある。関上が緊であれば、心下が痛む。尺中が緊であれば、臍の下の少腹が痛む。

寸口が潜んでいれば、陽がなく、気が少ない。関上が潜んでいれば、血がなく、厥冷する。尺中が潜んでいれば、陰がなく、厥冷する。

寸口が微であれば、陽がなく、外が寒い。関上が微であれば、「中が実している」とある。(別本では「胃虚」とする。)さらに「能実、ゆえに裏急」とある。(別本では「胃気がない」とする。)尺中が微であれば、陰がなく、厥冷し、腹中が引きつる。(関上の「中実、能実、故裏急」は意味に疑義があるため、原文の語句を残した。)

寸口が滑であれば、胸が張り、気が上逆する。関上が滑であれば、中が実して上逆する。尺中が滑であれば、下痢があり、気が少ない。

寸口が数であれば、吐く。関上が数であれば、胃の中に熱がある。尺中が数であれば、悪寒があり、小便が赤黄色になる。

寸口が実であれば熱が生じ、虚であれば寒が生じる。関上が実であれば痛み、虚であれば張って満ちる。尺

中が実であれば、小便が出にくく、少腹が堅く痛む。虚であれば、閉じて通じにくくなる。
 寸口が芤であれば、血を吐く。微芤であれば、鼻血が出る。関上が芤であれば、胃の中が虚している。尺中が芤であれば、下血する。微芤であれば、血尿が出る。
 寸口が浮であれば、その人は中風となり、発熱し、頭が痛む。関上が浮であれば、腹が痛み、心下が張る。尺中が浮であれば、小便が出にくい。
 寸口が遅であれば、上焦に寒がある。関上が遅であれば、胃に寒がある。尺中が遅であれば、下焦に寒があり、背が痛む。
 寸口が濡であれば、陽が弱く、自然に汗が出る。関上が濡であれば、下方に重く下がる感じがある。尺中が濡であれば、血が少なく、発熱と悪寒がある。
 寸が弱であれば、陽気が少ない。関が弱であれば、胃がない。尺が弱であれば、血が少ない。
 (以上、三部の二十四種の脈について総合的に述べた。)

脈経卷之十、終わり。

(提示された原文に基づく現代日本語訳。重複する条文と異文注は残し、判読できない字や意味の不明瞭な箇所は明記した。他の版本による文字の訂正は行っていない。)

2 🌱 明代李時珍 《奇経八脈考》における「気口九道脈」

手検図に曰く：肺は五臓の華蓋（かがい）であり、上は天に応じ、万物を解理し、精気を主行し、五行に法（のっと）り、四時に応じ、五味を知る。気口の中は、陰陽が交会し、中に五部があり、前後左右、各々に主る所があり、上下中央、分けられて九道となり、これを診れば病邪の所在を知るのである。

李瀕湖に曰く：気口の一脈は、分けられて九道となり、十二経ならびに奇経八脈を統率し、各々の診法を出す。これ乃ち岐伯が黄帝に秘授せし訣（けつ）なり。扁鵲はこれを推し進め、独り寸口を取って以て死生を決した。蓋し気口は百脈の流注・朝会の始まりなるが故なり。三部（の診法）は伝わるとえども、九道は淪隠（りんいん）したれば、故に奇経の脈は、世に知る人無し。今、図を撰し、並びにその説を後に附し、以て千古の秘蔵を洩らすと云ふ。

岐伯に曰く：

前部の外の如きものは、足の太陽膀胱なり。動ずれば目眩、頭項・腰背の強痛、男子の陰下の湿痒、女子の少腹痛の命門に引くもの、陰中の痛、子臓閉、月水不利に苦しむ。浮は風となし、澁は寒となし、滑は労熱となし、緊は宿食となす。

中部の外の如きものは、足の陽明胃なり。動ずれば頭痛・面赤に苦しむ。滑は飲となし；浮は大便不利となし；澁は嗜臥・腸鳴・食能はざるとなす。足脛痺す。

後部の外の如きものは、足の少陽胆なり。動ずれば腰背・胎股・肢節の筋痛に苦しむ。浮は氣となし。澁は風となし、急は転筋・労となす。

前部の内の如きものは、足の厥陰肝なり。動ずれば少腹痛の腰に引くもの、大便不利、男子の茎中の痛、小便難、疝気、両丸の上がり入るもの、女子の月水不利、陰中寒、子戸閉、少腹急に苦しむ。

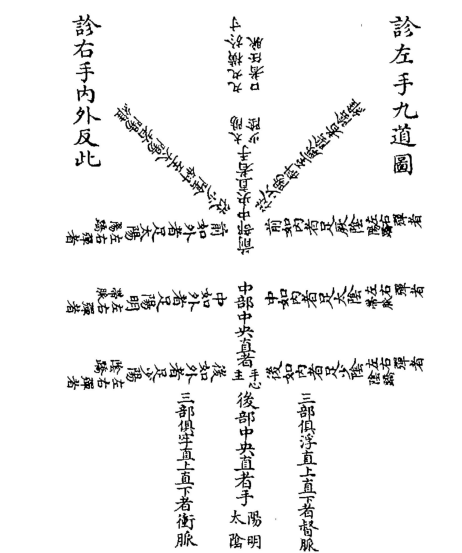
中部の内の如きものは、足の太陰脾なり。動ずれば腹満・胃中の痛、上管に寒有りて食下らざる、腰の上状居水中に在るが如きに苦しむ。沈澁は身重・足脛寒痛、煩満して臥す能はず、時に咳唾に血有り、泄利して食化せざるとなす。

後部の内の如きものは、足の少陰腎なり。動ずれば少腹痛の心と相引いて背痛む、小便淋、女人の月水来たりて上に心胸を搶（つ）き、脇満、股裏拘急するに苦しむ。

前部中央の直なるものは、手の少陰心、手の太陽小腸なり。動ずれば心下の堅痛、腹脇急に苦しむ。実急なる者は感忤（かんど）となし、虚なる者は下利・腸鳴となす。女子の陰中の痒痛、滑は有娠となす。

中部中央の直中なるものは、手の厥陰心主なり。動ずれば心痛、面赤、多喜怒、食の咽に苦しむ。微浮は悲傷・恍惚に苦しみ、澁は心下寒となし、沈は恐怖にして人の將にこれを捕らへんとずる状の如く、時に寒熱し、血氣有るとなす。

後部中央の直なるものは、手の太陰肺、手の陽明大腸なり。動ずれば咳逆、氣息を得ざるに苦しむ。浮は風となし、沈は熱となし、緊は胸中積熱となし、澁は時に咳血すとなす。



前部、寸口に横たはりて丸丸たる者は、任脈なり。動ずれば少腹痛、逆気心に捨き、胸拘急して俛仰（ふぎょう）することを得ざるに苦しむ。『脈経』に云ふ：寸口脈の緊細実長にして下に関に至る者は、任脈なり、動ずれば少腹の臍を繞（めぐ）りて痛む、男子の七疝、女子の瘕聚に苦しむ。

三部俱に浮、直上直下する者は、督脈なり。動ずれば腰背の強痛、俛仰することを得ざる、大人の癰、小児の癰に苦しむ。

三部俱に牢、直上直下する者は、衝脈なり。胸中に寒疝有るに苦しむ。『脉経』に曰く：脈の来ること中央堅実にして径（直ち）に関に至る者は、衝脈なり。動ずれば少腹痛、上に心を捨き、瘕疝・遺溺、女子の絶孕有るに苦しむ。

前部左右に弾ずる者は、陽蹻なり。動ずれば腰背痛、癰癰僵仆・羊鳴、偏枯・痺・身体強に苦しむ。

中部左右に弾ずる者は、帯脈なり。動ずれば少腹痛の命門に引くもの、女子の月事来たらず、絶継して復た下り、人をして子無からしむ、男子の少腹拘急、或は失精するに苦しむ。

後部左右に弾ずる者は、陰蹻なり。動ずれば癰癰寒熱、皮膚強癢、少腹痛・里急、腰胯相連なりて痛む、男子の陰疝、女子の漏下止まざるに苦しむ。

少陰より斜めに太陽に至る者は、陽維なり。動ずれば顛仆羊鳴、手足相引く、甚だしき者は失音して言ふ能はず、筋肉痺痒に苦しむ。

少陽より斜めに厥陰に至る者は、陰維なり。動ずれば癰癰、僵仆羊鳴、失音、筋肉痺痒、汗出でて惡風するに苦しむ。